

述語の名詞化と項の出現に関する覚書

依田 悠介

1. はじめに

本研究では、述語と項の関係、とりわけ格表示の交代に着目し、名詞化環境における項の出現のしかたの検討を目的とする。特に、日本語の名詞化構文と格交替現象を、Differential Argument Marking (DAM: Hopper and Tompson 1980, Tsunoda 1981, Bossong 1985, Aissen 2003) の観点および、López (2018) の分析と関連づけて考察する。

2. 日本語の格交替現象の類型

日本語では、述語と項の関係に関して以下の様な多様な格交替現象が観察されている。主格/属格交代現象 (Harada 1971, Bedell 1972, Nakai 1980, Miyagawa 1993, Watanabe 1996, Ochi 2001, Hiraiwa 2001) は特定の連体修飾説や名詞節、副詞節で主格が属格に交代する。また、目的語が介在する場合に交代は生じない。

(1) 主格/属格交代現象 (Nominative Genitive Conversion)

- a. 太郎 {が/の} よく行く居酒屋 b. 嵐 {が/の} おさまるまでここで休む。 c. 太郎 {が/*の} 酒を買った店

つづいて、関西方言では目的語を標示する対格も特定の環境下において属格として実現することも指摘されている (Ura and Asano 2007, Asano and Ura 2010)。

(2) 対格/属格交代現象 (Accusative Genitive Conversion)

- a. ゴミ {を/の} 捨てる場所 b. 力 {を/の} 入れる科目

さらに、述語が名詞化された場合には、主格、対格ともに属格で出現することも知られている (Miyagawa and Tsujioka 2004, Kishimoto 2005, 2008 他)。

(4) 連用形名詞化による格標示の交替 (5) 動名詞句での格標示の交替 (6) -方名詞化

- a. 太郎が働いた a. 太郎が物理学を研究をした a. 太郎が花子に花をあげる
b. 太郎の働き b. 太郎の物理学の研究 b. 太郎の花子への本のあげ方

これらの日本語の格交替現象に対して、格の認可のメカニズム、項の出現位置、その随意性などの観点の方向から議論が繰り上げられている。

3. Differential Argument Marking と名詞化

つづいて、世界の言語に目を向けてみると、上記の様な現象だけでなく、格標示の差異が意味的特徴により関係づけられる現象として、Differential Argument Marking (DAM) が知られている。DAM を駆動する代表的な要因として (7) が挙げられる。

(7) DAM が駆動される要因 (Bárány and Kalin 2020)

- a. 有生性 (Animacy/Person: Silverstein 1976, Croft 1988, Comrie 1979)
b. 特定性 (Specificity/Definiteness: Silverstein 1976, Croft 1988, Comrie 1979)
c. 情報構造 (Information Structure: Dalrymple and Nikolaeva 2011)
d. 被影響性 (Affectedness: Naes 2004)

例えば、トルコ語では、目的語の特定性によって対格標示が変化することが指摘されている (Kornfilt 2008)。(8) の例では、目的語の *kitap* 'book' の格標示が意味によって異なっている。

(8) トルコ語の DAM (Kornfilt 2008)

- a. (Ben) bir kitap oku-du-m
I a book read-past-1sg
'I read a book (non-specific)'
- b. (Ben) bir kitab-ı oku-du-m
I a book-acc read-past-1sg
'I read a certain book. (specific).'

このような意味により、駆動されると考えられている DAM にかんし、López (2018) では、スペイン語の例を取り上げ名詞化構文との関わりについて分析を提案している。そこでは、動詞のイベント構造の違いが DAM の可否を決定すると主張されている。具体的に、López は動詞が Process を表す場合には DAM が駆動され、Change-of-State を表す場合には DAM が不可能であると観察している。

(9) スペイン語の名詞句内の DAM (López 2018)

- | | |
|---------------------------------|----------------------------------|
| a. EL ataque del perro a Juan | b. *La captura del perro a Juan. |
| the attack gen.def dog dom Juan | the capture gen.def dog dom Juan |
| ‘The dog’s attack on Juan’ | ‘The dog’s capture of Juan’ |

López では、(9) の際を Ramchand (2008) の構造に基づき、Process nominal においては、内向が *n* からアクセスが可能である一方で、Change-of-State nominal の場合には *n* からの内項へのアクセスがブロックされるという統語的な局所性に還元している。

4. 日本語の二重目的語構文との関係

本節では日本語の二重目的語構文 (DOC) の格標示について同様に検討する。日本語の DOC において、与格で表示された関節目的語は名詞化の環境内で与格標示を保てないことはよく知られている。

(10) 日本語の DOC の名詞化と格交替

- | | |
|---------------------|------------------------------|
| a. 太郎が花子にプレゼントをあげた。 | b. 太郎の花子{*の/*にの/への}プレゼントのあげ方 |
|---------------------|------------------------------|

この変化を検討するにあたり、方名詞句の統語的な特徴を確認する (Kishimoto 2006, 2008 他)。方名詞句は、(11) に示す様に、アスペクト形式とは共起しない。また、状態動詞とも共起せず、行為の方法を表す。これらから、日本語の方名詞化は Change-of-State や結果状態を含むことはできず、Process のみが含まれる可能性がある。

(11) 方名詞句の統語的特徴

- | | | |
|-----------|--------------|--------------|
| a. 太郎の走り方 | b. *太郎の走ってい方 | c. *太郎のそこにい方 |
|-----------|--------------|--------------|

これらの考察をもとにした場合に、日本語の二重目的語構文への方名詞化は以下の様な課題を提示する。まず、名詞化の派生に関する問題が挙げられる。方名詞化はこれまで統語的な現象であると考えられており、*vP* をホブに取ると考えられてきた。この仮説が事実であれば、*vP* 内部の与格表示される名詞句の格は方名詞化を見込んだ上で格標示を事前に受けているか、あるいは、すでに *vP* 内で与格表示されているにも関わらず、それを再度名詞化辞が導入された段階で標示の変更を余儀なくされる。これらのいずれの仮説を取ったとしても、現行の理論において問題が生じる。

5. まとめ

ここまでで、日本語の格交替現象の特徴の紹介から開始し、世界の言語の格交替現象に関してどのような原理的説明が行われているのかを紹介した。また、スペイン語の格交替現象を取り上げ、生成文法理論はどの様にそれを捉えようとしてきたのかを紹介した。最後に、再び日本語に戻り、これまでに指摘されているものの理論的な説明を与えられてこなかった例を用いて、そこから見える問題に関して指摘した。

これらの事実は、日本語の名詞化構文における格標示の振る舞いが、イベント構造や格認可のメカニズムとの関係において再検討を要する可能性を示唆している。

主要参考文献 Bány, A, and L, Kalin. 2020. Case, agreement, and their interactions: Newperspectives on differential argument marking. /Kishimoto, H. 2006. Japanese syntactic nominalization and VP-internal syntax./Kishimoto, H. 2008. Ditransitive idioms and argument structure. /Kornfilt, Jaklin. 2008. DOM and two types of DSM in Turkish. /López, L. 2018. Case and the event structure of nominalizations. /Ramchand, G. 2008. Verb meaning and the lexicon.